

一、栃木部落のはじまり

これらの入植者は、栃木団体が国から補助を受け、出発前に、入地する場所、つまり何線の何番に入地することが知らされていたのと違い、一定の条件下のもとで入って来ている。又、農業経験者が大方であったことも特徴的である。

他県から入植した者の旅費や入地してからの諸経費の殆どは、個人負担だった。ただ入植にあたっての補

氏名	県名	入植年	備考
一色勇助	愛媛		
黒川重助	"		
今井松次郎	"	大正一〇年	
高瀬市太郎	"	明治四四年	
鴻之池 蔦次郎	"	大正二年	
中井平吉	福島		
遠藤勇作	"		
天野清六	"		
相良宣重	"		
松川国造	岐阜		
菅原岩松	"		
上村小十郎	"	大正二年	
山下福松	"		
鈴木鉄太	山形	明治四四年	
青木留吉	"		

鈴木徳松	石川	大正二年	
畑尾愛次郎	岡山	"	
牧野仙太郎	熊本	"	
山口長作	富山	"	
安部辰四郎			
檜垣和夫			
田中利八			
前田兵三		大正二年四月	
及川春三郎	宮城	大正三年一月	
菅野肥治			
添田茂右衛門			
藤原			
古井戸由松			
竹内治部兵衛			
江部			
関藤			

助として国からあったのは、味噌、醤油、麦等の一年間の現物支給と、この時代の北海道の内陸部、北辺は人跡未踏の地だったこともあって、北海道開拓者に汽車賃の割引きをする程度のものであった。

入植するためには、まず、出身県から移住証明書を出してもらわなければならなかった。その移住証明書は、北海道庁若しくは支庁に提出し、そこで初めて図面上であったが入地する場所を指示されたのである。

そして、開墾が五町歩（約五ヘクタール）以上されていなければ、入植者の賦与地にならないという条件も課せられていた。又、栃木団体の入植者には土地を抵当に入れ、生活、営農資金として、多額の借財をしたものの、返済出来ず、土地を没収される人がいた。又、この期の人達の多くは、「現物返し」といって、種子等の融通し合いをしていたがそれが出来ず、自分の土地を離れて行った人もいたという。これらの人々は、馴れぬ厳しい開墾に耐えかねて離脱、落伍して行ったのである。中には、入植して一か月も経たないうちに立ち去る人もいたという。

他県からの入植者には、このような土地を買いとった人の小作人として、或いは、農業や土地を放棄する人から個人的に払い下げを受け、入地する人が多くいたという。

しかし、入植した他県人も、開拓への執念については、栃木団体の人々にひけはとらなかつた。

山形県出身の鈴木鉄太氏も、その一人であった。大正元年に、武士（現在の若佐）の農家より薄荷の根を買い入れ、すでに薄荷の試作を始めているのである。

第一次、第二次移住者の職業（判明している人のみ）

（この表の農業外の職業は、農業との兼業である。）

一、栃木部落のはじまり



千葉イシさん

で乗った船が火事になり、荷物などに破損があった。函館に着いて小樽回りで帯広―池田―置戸を通過して北

明治四四年四月上旬、栃木県下都賀郡寒川村大字押切を、両親と私を含めた子供四人の六人家族は、北海道移住団として郷里を後に出発し、小山駅に集合する栃木県六六戸の団体と、群馬県の団体（胆振に入植）の二つの移住団は、

開拓の思い出

千葉 イシ

又、家業の分は、家業としておこなっていたが、職人として勤めていたかは不明である。

藤沼藤八	長谷川市五郎	稲葉利兵衛	猪瀬長重	稲葉文之助	松本亀之助	田中鷹之助	佐瀬庄太郎	瀬下六右衛門	小林豊次	氏名
"	"	"	"	"	"	"	"	"	部屋村	出身村町
"	労務者	粕屋	労務者	"	"	"	農業	役場収入役	桶屋	職業

阿部利三郎	田熊福松	大島留次	渡辺勝蔵	古沢丑之助	今泉勇次郎	大島末蔵	菊地森造	神原信一	大島弥三郎
三鴨村	"	"	"	"	寒川村	"	"	"	"
機織業	大工	焼物業	製米業	労務者	建築士	焼物業	機織業	菓子屋	焼物業

石川音五郎	藤沼万吉	松本正一	渡辺長八	大島喜之助	綾部浪之助	篠原勝吉	池田常吉	岡泉忠一郎	遠藤弥三郎
藤岡町	"	"	"	"	"	"	水代村	豊田村	"
醤油醸造業	農業	労務者	農業	綿屋	"	農業	畳屋	農業	床屋

茂呂近助	岡部新衛	関口兼吉	川島平三郎	木村長三郎	永塚栄七	川島平助	秋山弥蔵	福田太平	峯崎忠三郎
"	"	"	"	"	谷中村	"	谷中村	日光町	"
谷中村村長	"	"	"	農業	醤油醸造業	"	農業	蕎麦業	"

見（当時野付牛）に入った。北見から相内三区迄馬車で来て、ここで一泊する。相内から留辺蘂までまた馬車に乗り、留辺蘂からは、まだ雪があるため馬籠を利用した。馬籠には、年寄りと子供だけで、大人は歩いて若佐（当時武士）に夜遅く着き、それぞれの家に分かれて泊った。私達家族は、武士の青木与雄さんの家に一週間程泊った。四月二日は栃木に入植する日だった。今の栃木橋のところに、大きな桂の木の風倒木があり、それを橋にして川を渡って栃木に入った。私達が入る家は、着手小屋といって、若佐（当時武士）の人達が今の一七線と一八線の間で建ててくれた共同住居だった。

雪も融けた六月には、共同住居から通って自分の土地の開墾にはげんだ。そして、開墾のかたわら建てた家に移り住んだのは秋頃だった。私の家の隣が渡辺勘次さんの家で、渡辺さんでは、大きな木を挽いて板をつくり、風呂を造っていた。私達家族も、よく入れてもらった。

入植当時、若い働き手のある家は、開墾もどんどん進んだが女や子どもの多い家は、大木を切り倒すことも慣れていないので大変苦労していた。入植した年は、種子を蒔くのが六月上旬頃となり、蕎麦、馬鈴薯、南瓜などを植えた。次の年から麦、イナキビ等を蒔いたが、食糧を確保するのがやっとだった。小遣は、冬の造材の除雪作業などに出てつくった。当時は、丸太の運搬も馬でなく、流送（武士川）で運んだ。川のふちに建てた家は、その丸太でよくこわされたものだ。

入植して間もなく、それも五月から一ヶ月迄、私は相内三区の小口さんと言う家に子守りとして働きに出されました。内地から来て間もなくのことでもあり、また、北海道の言葉も充分わからず、一三歳と言えば、まだ子供だったから、本当につらい思いをした。

入植して三年目頃、私の家と古沢さんの家が共同で馬を一頭購入した。その馬が開墾にたいへん役立って

いた。耕作、抜根作業などに、どれだけ役に立ったかわからない。この馬の購入は、入植した人達の中では、一番早かったと思う。

入植した年は、食糧も充分収穫できず、家族の多い家はたいへんだったろうと思う。

土地を担保に入れて食糧の確保に懸命だった。今の中園方面に、よく出かけたようだった。若い人達は我慢出来ても、老人や子供はかわいそうだった。当時は、米があっても買えず、主に燕麦、イナキビが常食で、麦さえも十分に食べられなかった。そんな生活でも、楽しみと言えば盆踊り（八木節）だった。踊って、苦勞を一時、まぎらわせていた。今思えば、現在の生活は、まるで天国のようだと思う。

千葉イシさんは、両親（今泉勇次郎さん）と共に、一二歳で栃木に移住し、現在は八一歳という高齢にもかかわらずご健在である。

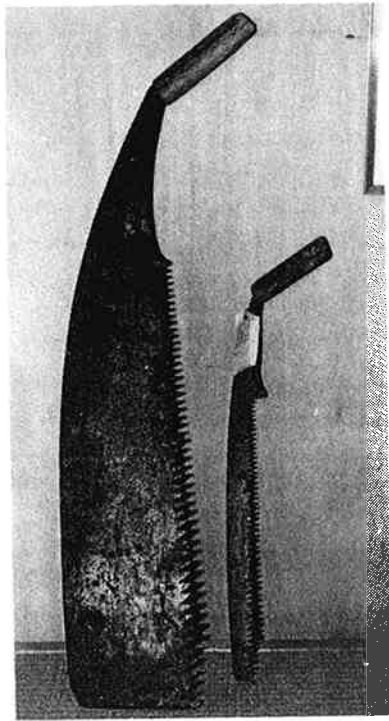
2、道路開削

四一号道路開削

武士（現在の若佐）から栃木までの道路に四〇、四一、四二号の三幹線道路がある。

しかし、現在利用されているのは栃木部落の中心を直線上に約六キロメートル走る四一号線幹道路と、四〇号幹線、四二号幹線が一部牛乳集荷道路だけである。

この幹線道路は、国道三三三三三三線から右に直角に折れ、一五線を起点に、一線間約六〇〇メートルの一三



開拓当時の鋸

る。

土層そのものは、堅いが、鍬、スコップで充分、耕すことができる。しかし盤層状が地下四〇〜五〇センチメートルのところにあるので、透水性が悪く、灰色斑紋鉄、マンガン錆が多くみられる。酸性度の強い地質が殆どである。

③ 開拓

開墾する土地に入ってまずしなければならぬことは、住居を建てることだった。樹木を切り倒し、掘立式の柱とし、大木を割って作った板や長桁、松枝葉を縛って板壁にした。屋根は、桂、樺の樹皮、或は、熊笹で葺いた。それらを打ち付ける釘もないありさまだったのでブドウ、コクワのつる、ニレの樹皮で結びつけたりした。建てられた住居は、掘立式の三角小屋（拌み小屋）が殆どであったという。

土地の開墾は、大木を切り倒すことと、熊笹を刈りとることから始められた。今では考えられないことだが、当時、木材は商品として売れず、従って、入植した移住者達にとっては、一番の厄介物だった。

入植した殆どの移住者達は、栃木県では、兼業農家であり、人跡未踏の地に入って開拓するということは全くの素人であった。その上、開墾のための道具といっても、鍬、鎌、鋸しか持たなかったのだから、その苦勞は、なみたいていのものではなかった。

大木を切り倒すと、手や、てこで転がし、一箇所に集め、それに枝等を積み重ね火をつけて燃やした。その黒煙は、部落を覆い夜となく昼となく続いたといわれる。



開拓当時のマサカリ

その頃、山火事が頻繁と発生したのも、それらの走り火、残り火が原因ともいわれている。

大木を切り倒して燃やした後は、笹、雑草に火をつけて畑にした。とにかく、畑にするためには、余分なものをすべてを焼き払うより方法はなかったのである。

入植・開墾・蒔付・収穫までは、わずかの自分の持ち金と、国の補助金で武士・中園の農家や留辺蘂、遠くは常呂、湧別まで行って、農具、種子、米、塩、味噌、醤油等を買って来て農作業にはげんだといわれる。

当時は、今ののように、交通機関はなく、徒歩が殆んどであった。店といっても、若佐（当時武士）には、中西商店が一軒、佐呂間市街（当時鋤沸村）に三軒しかなく、商品は、用が足せるだけのものはなかったらしい。

使い慣れない農具で、焼跡に畝を掘り、馬鈴薯・南瓜、蕎麦、トウキビ、イナキビ、菜種、豌豆等を植えたが、収穫した作物の大方は出荷までいかず、自家用の食糧になった。入植した年の一年間は、手当として

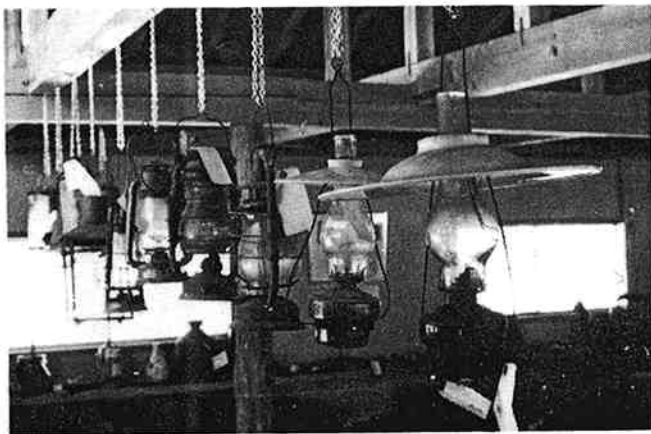
家族数に応じた麦、味噌、醤油の現物支給はあったが、当時の主食といえば、麦又は蕎麦であった。馬鈴薯、南瓜、トウキビも時折り主食になったといわれる。

武士川には、山女魚、ウグイ、ドジョウがとれ、乾燥して冬の味噌汁のだしにしたり、いくらでも採れた鱒、鮭を塩漬けにしたりして、冬場の食糧にあてていたようである。勿論、フキ、ワラビ、キノコも食膳にのった。

一、栃木部落のはじまり



つまご わらじ



開拓当時の灯火具



みの笠 背負農具

しかし、米だけは、容易に食べられなかったようである。正月とか、盆、病気以外は、経済的にも食することができなかつたという。

大正二年の降雪による大凶作の時には、経済的にも、収穫にも大打撃を被つたといわれる。植え付けたものの、当座の食糧がなく、いったん植えた種芋を、新芽が出るのを待つて掘り出して食べた、種芋の皮をできるだけ厚く剥き、その部分だけを植え、残りを食糧にするなどして飢えを凌いだ人もいたという。

夜は、手ランプ（カンテラ）、百刃ロソク、土間に造つた炉の焚火で明りをとつたという。その焚火は、熊等の野獣の襲来を防ぐのに役立つたらしい。住む家の中は、畳の替りに筵を敷いたり、寝床には、干草を

敷きつめて寝起きた人もいたという。

この様な貧しい生活の中で、家族が肩を寄せ合って過ごした夜を偲ぶ時、先達者の労苦を推し測る術を知らない。

しかし、開拓にも、生活にも、このような悪条件があったにしろ、それぞれの入植移住者達は、開墾に必死に打ち込んでいたのである。

その例として、大正二年に、古沢丑之助、今泉勇次郎の両氏が共同で農耕馬を購入している。農耕馬を購入したのは、栃木ではこれが最初といわれている。

明治四四年から大正二年迄のこの期の人達は、自給自足というよりも、開墾するということだけで精いっぱいではなかったかと考えられる。

開拓の想い出

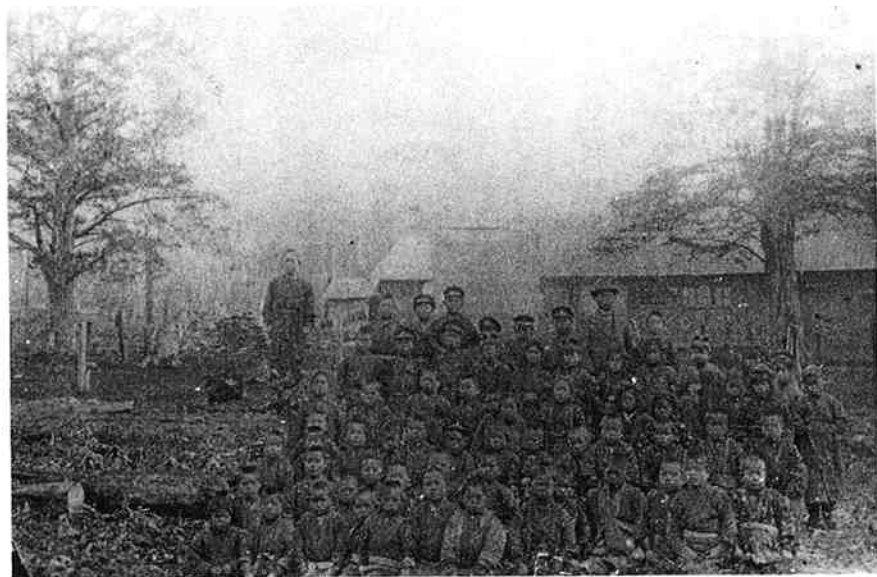
阿部 文三（七八才）

当時一緒に入植して来た隣りの家の七〇歳の老人が病気になった。その老人の家庭は、息子と孫だけで、女がいない男ばかりの家庭であった。

家は、狭い堀立小屋で出来ていて、冬は、雪や風が吹き通しだった。

老人が病気になったといっても、医者はいない。薬もない。又、食べさせる米すら一粒もないありさまだった。余命幾ばくもないと知った隣の人が、イナキビのボタ餅を見舞にと持って行ったら、その老人は、床の中で「一寸、遅うございました。」と言って息を引きとったと言った。

この話を聞いた当時の人達は、気骨のある爺さんだと言って、語り草にしたと言う。私には、最奥の地に



特別教授場と当時の子供達

入植した開拓者の悲哀として、今だに頭に残っている。

阿部文三さんは、阿部利三郎さんの三男で大正七年、一五歳で栃木に移住している古老である。

4、文化の始まり

(1) 学校（創立時代Ⅱ大正二年）

明治四四年と大正二年に栃木団体の入地を見、その後、他県からの移住者も後を絶たなかったが、大正二年、つまり入植して三年目には、農業を基盤とする生活が一応安定し始めていたことから、入植者たちは子弟教育の必要性を感じ、学校創立のため奔走するのである。

栃木小学校の沿革誌に、その時のことを次のように記している。

○ 大正二年六月一日。設置。「当字栃木一九線二四五番地栃木神社拝殿ヲ以テ仮教室ニ充テ下佐呂間尋常小学校所属栃木特別教授場トシテ設置認可アリ全年七月七日授業ヲ開始シタルガ本校教育ノ濫觴也、当時敷地二段歩ハ栃木部落川島平助氏ノ寄付ニナリタルモノナリ而シテ本校舎ハ元來栃木神社拝殿